

シンポジウム

「社会再生の民主主義」

【趣意書】

今年3月、日本は「未曾有」の大災害に見舞われた。巨大地震が東日本を襲い、津波の襲来によって東北・北関東沿岸は壊滅的な被害を受け、おびただしい生命と財産が奪われた。福島では、同時に発生した最悪レベルの原発事故によって、膨大な人びとが住居と土地を追われた。被災地の復興への道のりは険しく、原発事故は依然として収束のめどが立っていない。今回の大災害が、戦後日本の国づくりと社会づくり、それを主導した政治の根本的な欠陥を私たち国民に突きつけていることは間違いない。いま多くの人びとが感じているのは、復興とその後の未来には、新しい政治への転換が不可欠だということである。今回のテーマが決まったのは震災前のことだが、そうした想いに重ねて、「社会再生の民主主義」というテーマを掲げたいと思う。

すでに遠い過去の出来事のようなのだが、2年前の夏、総選挙で民主党が大勝し、「歴史的な」政権交代が行われた。かねて民主主義の成熟の証しであるかのように語られた「政権交代のある民主主義」が現実のものとなり、民主党支持のいかに問わず、新しい政治への期待は高まった。だが、その後の民主党政権の政策的な混迷、「カネと政治」の問題の噴出のなかで、新しい政治への期待はつぎつぎに裏切られ、国民の政治への不信は旧来にも増して高まった。震災後の政府の対応についても、政治の機能不全を問う声は大きい。いま懸念されるのは、現在の政治不信が従来の不信の域を越えて、民主主義そのものへの不信と絶望にまで波及しかねないことである。

政権交代に寄せられた新しい政治への期待は、「コンクリートから人へ」というスローガンが歓迎されたように、土建国家型の利益誘導の政治からの離脱であり、格差と貧困を拡大させた構造改革の政治からの離脱であり、生活と福祉を志向する「人へ」の政治の転換であった。相互に無矛盾とはいえないそれらの期待は、さしあたり一連の意思となって総選挙における民主党の大勝につながったが、政権交代後には、相対立する政治力学となって民主党政権の混迷と変質をもたらし、やがて当のスローガン自体が放棄された。新しい政治への期待は失望に変わり、その結果として生じた参議院選挙後の「ねじれ」がさらに政局を流動化させた。そして、震災後の政治への不信。いま、私たち突きつけられているのは、現代社会において民主主義とは何かという、原点からの問いなのである。

代議制民主主義の液状化とも思える今日の事態の背景に、二大政党制をもくろんで導入された小選挙区制の生み出した歪みがあることはいままでもないが、さらにその背景

に、社会の液状化（バウマン）ともいうべき現代の変容があることに注意したい。現代社会のそうした変容を象徴的に示したのが、2005年9月のいわゆる郵政選挙における小泉自民党の大勝であった。当時、中曽根元首相は小泉政治の大勝を分析して「粘土が砂になった」、「もはや砂は粘土には戻らない」と語った。利益誘導によって粘土のように固められた既成の政治を嫌悪し、人びとが砂のような個人に向かう衝動を、小泉政治はみごとに洞察して選挙に勝ったというのである。この比喩を受けていえば、砂の上に建てられた小泉政権以降の政治（民主主義）は、不安定な地盤の上で動揺をくり返し、政権交代の衝撃によってついに地盤を液状化させ、いまや倒壊の危機に瀕していることになる。

だが、中曽根氏の言葉は事態をあべこべに語るものである。人びとが「砂」になったのではなく、旧来の保守政治が、土建政治によって人びとの生活の基盤を粘土のように膠着させて民主主義を形骸化し、その後、構造改革のかけ声とともにその基盤を粉砕し、人びとを砂のような孤立に追い込んだのである。ポピュリズムという言葉で現在の民主主義の危機を語るとすれば、その危機は、旧来の政治が生み出した、民主主義の基盤を掘り崩す社会の液状化の危機から発生しているのである。

今回の地震と原発災害は、日本において人びとの暮らしを支える政治と社会の基盤がどれほど脆弱なものであり、歪みの大きいものであったかを国民に突きつけた。東京に一極集中する経済発展と地方経済の衰退、政財界を挙げて推進された原発路線と地方への原発誘致、そうした政治を既定のものとして疑うことのなかった多くの国民。大災害の窮状は日本での民主主義の窮状をも映し出している。この窮状のなかで、復興とその後の未来に向けて、人びとをつなぎ、社会を再生させる新しい政治と民主主義が希求されている。いまの日本において民主主義が何かとえば、それは多数決や政権交代に終わるものではなく、人びとの生活の基盤ときずなを回復し、民主主義が機能する社会を再生させること、すなわち「社会再生の民主主義」でなければならない。

本シンポジウムでは、以上のような問題意識に立って、現代において求められる民主主義の在り方、その条件と課題について、三つの糸口から討論を深めたいと思う。第一に、成熟した福祉国家を現出させた北欧政治における民主主義の概念と経験に学ぶこと。第二に、生活と社会の基盤を掘り崩す現代の資本の猛威に対して、これを制御する社会運動・労働運動の意義を見きわめること。そして第三に、今日の危機を衝き、社会再生に向けた民主主義の哲学の深化を図ること。三人の報告者からそれぞれ問題提起をいただき、大震災後の時代における新しい政治と民主主義の課題をめぐって、活発な議論をくり広げたい。